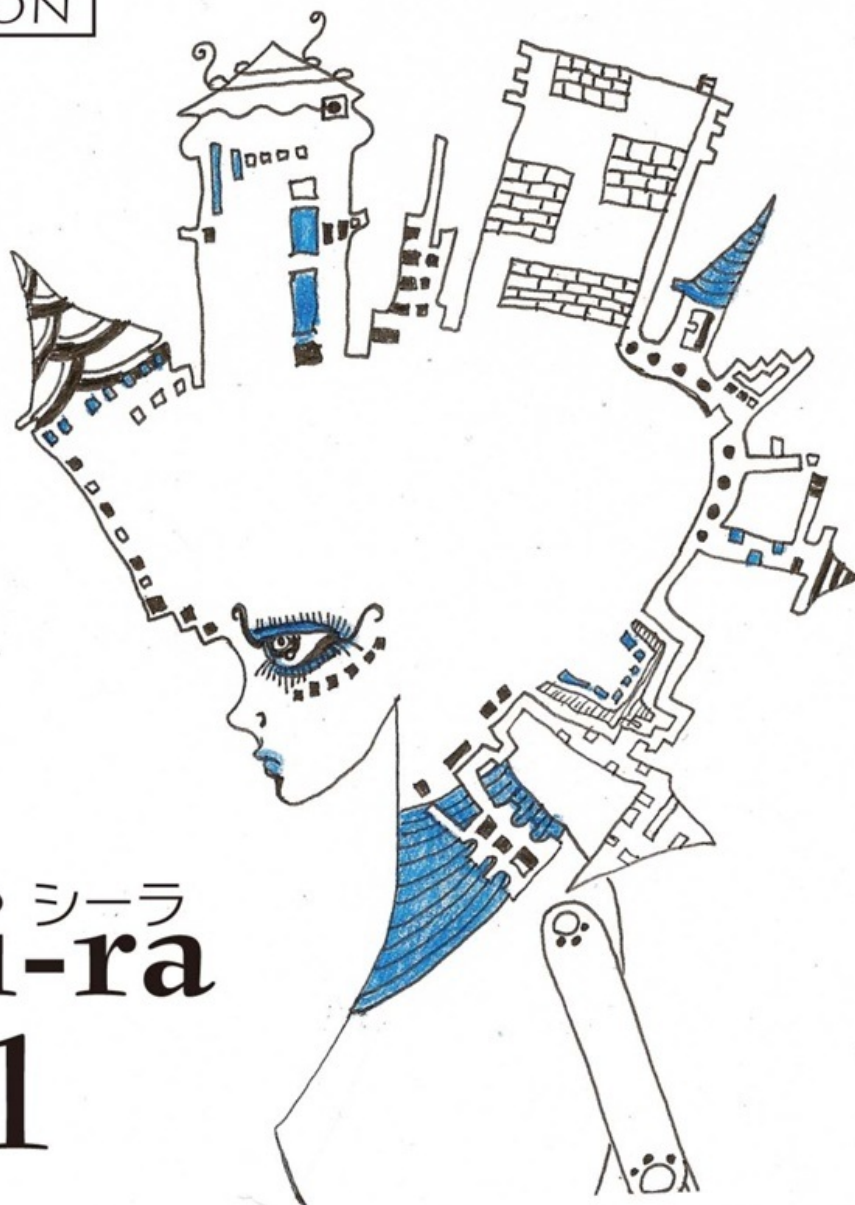




おとな絵本  
OTONAEHON

5分間のヒマつぶし



シーラ  
**shi-ra**  
1

Illustrated: Kohaku Ituki / Writen: Joe Mi yabi

晴耕雨読してみ方  
～勘違いか shi-ra～



晴耕雨読。

「田園で世間のわずらわしさを離れて、心穏やかに暮らすこと。  
晴れた日には田畑を耕し、雨の日には家に引きこもって読書する意から」

そういうわけで、ワタシは、晴耕雨読に挑戦した。

晴れの日には畑を耕す。

オンナがひとり、畑を耕すとは…いったい。

本来、畑はオトコ衆が耕すべきものかもしれない。

いずれにしても、なんとも心地よいひとときではある。

雨の日には読書にいそしむ。

何を読むか…たいていのものは読んでしまっている。

しかたなく、自分で読むための自分の本を書いて、自分で読んだ。

思い通りの結末になるのはいいが、結末は始めからわかっているのが難点だ。

晴耕雨読。

それは、究極の自家発電なのか…。



白い箱のパーティ  
～生まれかわったか shi-ra～



クラス委員だった私は、代表で担任の先生とともにお葬式に参列することになった。

長い列をつくり、なにやら儀式めいた所作を次々と繰り返す人々。

いったい何をどうすればいいのか。クラス代表というプレッシャーと、近よってくるストーカーのような恐怖に、じわじわとワタシは緊張した。それに気づいた先生は囁いた。「大丈夫。先生のやるとおりにするといいよ」

先生の順番がきた。彼は、おもむろに白い長い箱の中に左足、右足と順番に入ると、箱の中に静かに横たわりながら言った。「ほら、こうするんだよ。キミがボクの周りに花を並べておくれ」と。

ワタシはいままで緊張の塊になっていたこともあって目に映らなかったのだが、広い会場には、たくさんの白い長い箱が並んでいたことに気がついた。

ワタシも見よう見まねで、先生の隣りの白い箱に横たわると、次の参列者の人が白いユリの花をワタシの全身に散りばめてくれた。

隣の箱の中から、「こうしてると、なんだか生き返った気がするなあ」と先生の声が聞こえた。

ワタシは、そんなもんかなあ。それが大人の間違ってやつなのかなあ、と思った。

---



「人生はゲームさ」。チョイ悪オヤジがいいそうなセリフだ。  
受験、就職、結婚…と人生の折々で賭けにでて、  
迷い、悩み、失敗し、成功したり…確かに人生はゲームかも知れない。  
ゲームならカードゲームがいいな。  
ハート、ダイヤ、スペード、クラブ、と好きなコースを選べるとしたら。  
ダイヤの女はどうだろう。富に恵まれてなに不自由なく暮らす。  
でも、最後は墓場のなかにまで、その富をもっては行けなかった。  
クラブの男はどうだろう。力はある。ばりばり働き続けた。  
でも、働いても働いても、賃金は雇い主に搾取された。  
ハートの女はどうだろう。誠実であたたかな心は美德だ。  
でも、その人の良さで、いつも誰かに騙され続けた。  
スペードの男はどうだろう。豊かな知識と的確な判断力、周囲にも好かれる。  
でも、病にたおれ若くしてこの世を去ってしまった。  
ん〜ん。ダイヤ、クラブ、ハート、スペード。  
いったいぜんたい、どいつの人生を選ぶべきか。  
ジョーカーは、酒を飲みながら今夜も考えた。

---

太鼓持ち  
～悲しいのか shi-ra～



えっ？ ピエロ？ アタシャね、女の太鼓持ち。

ダンナ衆を楽しませて、ご馳走を相伴したりお足をかせいだりする商売ですよ。

「おや、ダンナ、いい体格だねえ。さぞかし竿もいいものをお持ちなんでしょうね。

えっ？ いまから釣りに、じゃアタシもお供を、釣りもいいですけど、今日あたりどこかで一杯やりたい気分じゃありませんか。お供しますよ」ってな具合ですよ。

どうです、楽しそうな商売でしょ。でもね、ひとしきり仕事が終わると、ずずう～と気分が沈むんですよ。はたして、アタシこれでいいのかってね。

心は沈みに沈んで、底の底までいってえと、ざばあ～っと、地球の反対側にでるんですよ。

誰もいない大きな海を泳いでいるうち、島にたどり着く。

島には、見慣れない人々が大勢いる。

人を目の前にすると、いてもたってもいられないアホなワタシが顔をだすんですよ。

んでもって、そこでも太鼓持ちとしてちょっと人気者になるってわけですね。

うまくできてますよ、地球ってやつは。







猫にでもなるか。

猫はいいぞ。好きなときに遊んで、好きなときに丸くなって眠り、お腹がすいたら「アナタがいちばん好きよ」とゴロニャンして、気が向かないときはそっぽを向く。なんとも自由気ままだ。でもねえ、すぐに飽きた。自由すぎるというのもけっこう退屈なのだ。

犬にでもなるか。

散歩のお供をして、投げたボールを拾ったり、ときどき吠えたりする。それだけで、賢いねえって頭をなでられる。でもねえ、すぐに飽きた。首輪でつながれて、拘束時間が意外に長いのだ。

鳥にでもなるか。

自由に空を飛んで、きれいな声で恋を語り、子どもを卵で産むから大きなお腹をかかえて暮らさずにすむ。でもねえ、すぐに飽きた。飛ぶのはとても疲れるし、いつ撃ち落とされるか心配だ。

しかたない、人間にでもなるか。

遊びたい時に遊んで、眠くなったら寝て、雇い主にしっぽを振って、飛びたい時にはビルや崖の上から一度だけ飛べる。なかなかよい。

ただ…自分は何をすべきか、なんてくだらないことを考え込んだらいけませんよ。



ザムザの生い立ち  
～不当カイコか shi-ra～



入社して初めての給料日。

その会社は 毎月、社長から直接手渡しでお給金をもらう。

「ご苦労様 来月も頑張っておくれよ」「はい！ありがとうございます」

さっそくトイレで中身を見た。規定の明細よりも10万円も多く入っていた。

「何かの間違いか？ まあでもいい、ありがたく頂戴しよう」

翌月の給料日。さっそくまたトイレで中身を見た。今度は規定の明細よりも20万円も多く入っていた。「うわ！ やりい、また儲かっちゃった」

数ヶ月後、初めての夏のボーナスが出た。またまたトイレで中身を確認。「えええ！ すんごい。こんどは30万円も多く入ってる！」

半年後の朝礼で、社長の訓示。「新入社員の諸君、もう既にお気付きだろうが、キミ達にはここ半年の給料やボーナスをわざと多めに入れておいた。ところが、正直に返してこなかった残念な社員が一人いる」

社長はワタシの目の前にやってきてこう言った。「キミ、解雇だ」

そんなわけで、わたしはカイコとなり、その後、ザムザとして復活した。

---



(精神科医院にて)

シーラ「一日中こどもがバタバタして、うるさいのよね」

医師「ああ、田中さんちねえ。テレビの大家族番組出演を目指してる」

シーラ「毎週水曜になると昼間からアノの声がして、ヘンな気分になってくるわ」

医師「ああ、盛田さんちねえ。奥さんとこに若いツバメが来るらしいね」

シーラ「生ゴミ、アルミ缶、燃えるゴミ…分別、分別ってうるさい奥さんがいるのよね。  
じゃ、ダンナの死体は何曜日に捨てるのよ、ねえ」

医師「ああ、ステラさんね、外国人さんだけにエコにはうるさいから」

シーラ「通路で井戸端会議しないでって、今どきどこに井戸があるのよねえ」

医師「ああ、江戸端さんね、“えどばた” だけに関連ものにはうるさいらしいですよ」

シーラ「夜になると、ラッパだかラップ?の音楽がガンガン」

医師「ああ、齊藤さんね、難しいほうの齊の字を書く」

シーラ「でも、最近、干した下着が盗まれなくなったのだけは助かるわ」

医師「ああ、私この間、引っ越しましたから」

---



幸せと不幸せ  
～どちらが重いのか shi-ra～

一本のたばこの煙の重さを計る方法。

まず、吸う前のたばこの重さを計る -A。たばこを吸う。吸い終わった吸い殻の重さを計る -B。A-Bが煙の重さになる、という昔からあるトンチ話。

では、幸せと不幸せはどちらが重いのか。

気が重い、肩に荷を背負っている。こんな時、人は不幸せという。

気分が軽やか、肩の荷がおりた。こんな時、人はちょっと幸せ。

ということは、不幸せの方が重たいのかもしれない。

では、肩の荷の重さを計ってみよう。

まず不幸せだと思った時の体重を計る -A。次に幸せの時の体重を計る -B。

A-Bが、不幸せの重さ。

ところが、幸せの時は食事もおいしくて太るという。そんな時は幸せの方が重たい。

幸せと不幸せはどちらも重たいのか。そんなことを考えながら、不幸せを嘆きやけ食っているワタシ。翌日増えた体重は、はたしてどちらの重さなのか。

心の重さは計り知れない、のである。





shi-ra

<http://p.booklog.jp/book/38410>

著者 : miyabijoe

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/miyabijoe/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38410>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38410>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.